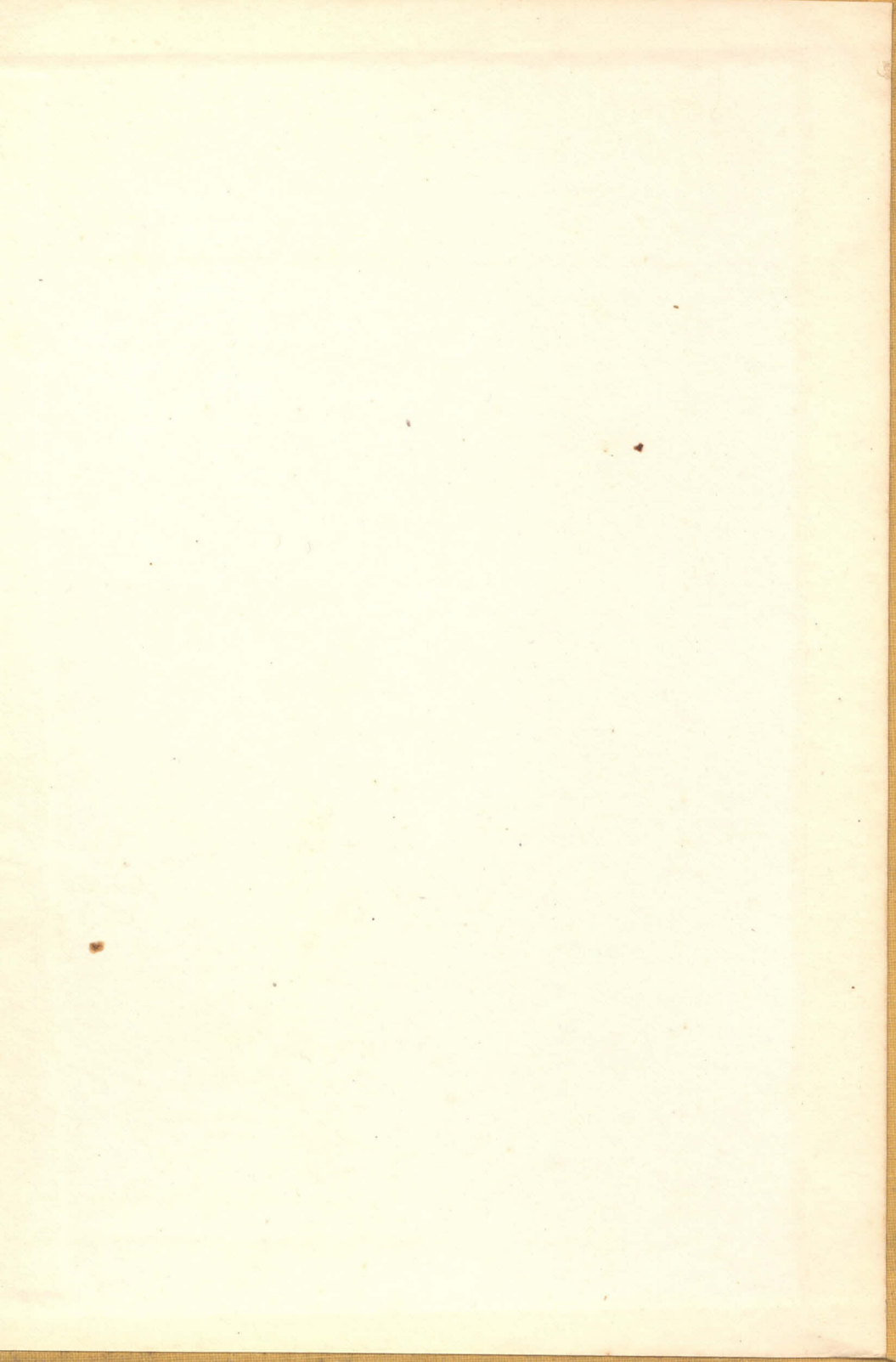


# 大興安嶺探檢

每日新聞社刊



# 大興安嶺探檢

1942年探檢隊報告

EXPLORATIONS IN  
THE GREAT KHINGAN  
MOUNTAINS

The Japanese Great Khingan  
Expedition 1942

Edited by  
KINJI IMANISHI

今西錦司編・毎日新聞社刊

COPYRIGHT, 1952, BY THE MAINICHI PRESS.

#### EXPLANATIONS TO THE MAP

The drainage map of the Northern Great Khingan (1:1,000,000) attached to the present volume was prepared by the expedition. It is based on the vertical aerial photographs taken by the Manchurian Air Line Company just before the expedition. The result of the aerial survey did not appear by the end of World War II, and are unavailable. The skewness caused by photography has been adjusted as far as possible with the result of the astronomical observations made during the present expedition, which are tabulated on the map. The map of Manchuria published in 1939 by the Japanese Land Survey (1:1,000,000) was consulted as to the courses of the Amur and the Argun. Mr. Sansei Ono was in charge of drawing the map.

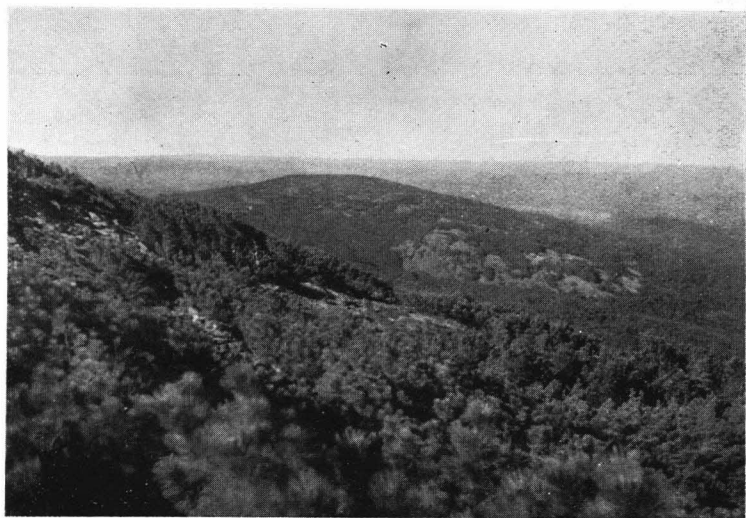


ガン河最上流のキャンプ。

この探検は、1942年の5月から7月まで、大興安嶺北部の密林地帯にむかっておこなわれた。



晩壯年期の波状山地は、森林におおわれて、えんえんとつらなり、北海道全島をのみこむ廣さの大高原となっている。森林限界をぬいた高峯はまれであるが、そこには、ハイマツと岩屑とにおおわれた、荒涼とした風景がくりひろげられる。



北部大興安嶺の最高峯オーコリドイ(1530m)のハイマツ帯。

ピストラヤ河源流の山々.



マンクイ川の上流.



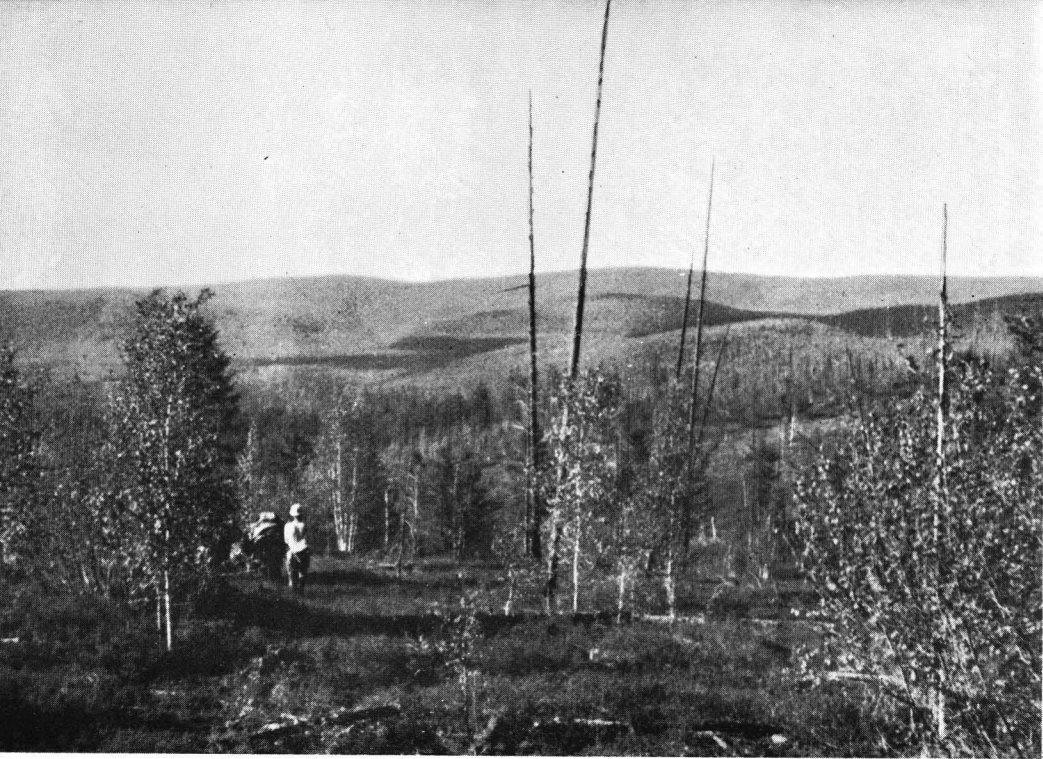


代表的なカラマツ林のながめ、地上にコケモモをしきつめている。

河谷の草原にまじったカラマツ大木の疎林。







山火事あとに株立ちとなったシラカンバ林。イソツツツの下生え。

森林は、圧倒的にダフリアカラマツによって優占される。コウアン



シラカンバもこれに次いでおおく、とくに山火事あとを特徴づける。地形的に乾燥した場所には、シベリアアカマツが小面積の純林をつくるのがみられる。



ガン河源流の大興安嶺主稜上のシラカンバ林。

森林限界の風景。ハイマツ、地衣におおわれた礫原、まばらに生えたカラマツ。





大形の礫からなる平地の礫原。アルパツハ河上流。

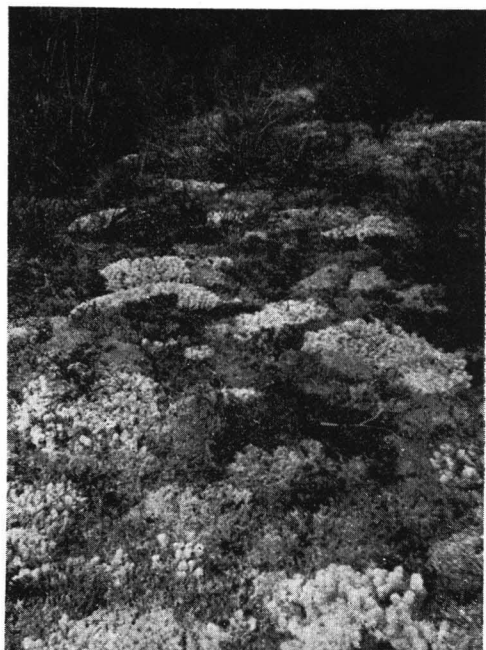
中央部の山地は、いたるところに露出した角礫の堆積と、そのうえをおおうハナゴケ類の地衣とによって特徴づけられる。この礫原は、過去の地質時代にこの地方を支配した、

酷烈な氣候の産物と考えられ、また現在の氣候のなおきびしいことをものがたる。

ハナゴケにうずめられた斜面の礫原。



ハナゴケ類の群落。





ヤンギール川合流点附近のガン河の谷のパノラマ。右手の前方からヤンギールがそそぎ、本流は峡谷をなして、左端の山の向うへと流れでる。

夏のターリンホの流れ。





ガン、ビストラヤ、アルバジハなどの大河は、いずれも幅ひろい谷をもち、そのなかを不規則に蛇行している。谷は、まわりの山地と対照的に、森林にとぼしく、廣大な濕地や草原によって占められ、流れに沿うて、ドロ・ヤナギの類の河辺林がよく発達している。



夏の支流は茶褐色ににごり、馬をのりいれるに不気味であった。



ガン河の下流，シルホーワヤのみごとな段丘.

花をつけた早春の野地坊主.

マメカンバの灌木ツンドラ，アルバジハ河上流.



谷をうずめた湿地は、探検隊の行動をさまたげる最大の障害であった。隆起したスゲ類の株の間に水をたたえた野地（ヤチ）坊主湿原はもっとも多く、また中央部の高地には、灌木性のカンバ類を密生した灌木湿原が、大面積をしめる。



水をたたえた野地坊主湿原。





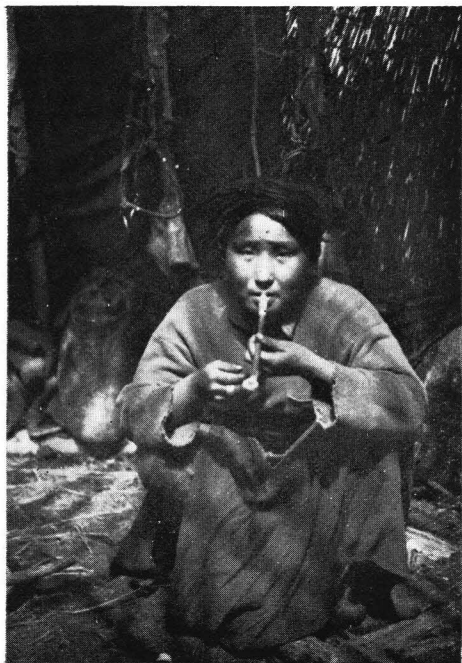
馬オロチョンのすまい、ガン河中流にて。

北部大興安嶺の住民は、ツングース系の狩猟民族オロチョンである。ガン河中流にすむものは、家畜として馬を飼っている馬オロチョンで、円錐形に木を組みあわせたすまい（ユルタ）にすみ、なめし皮の服を着、屍体を風葬する。

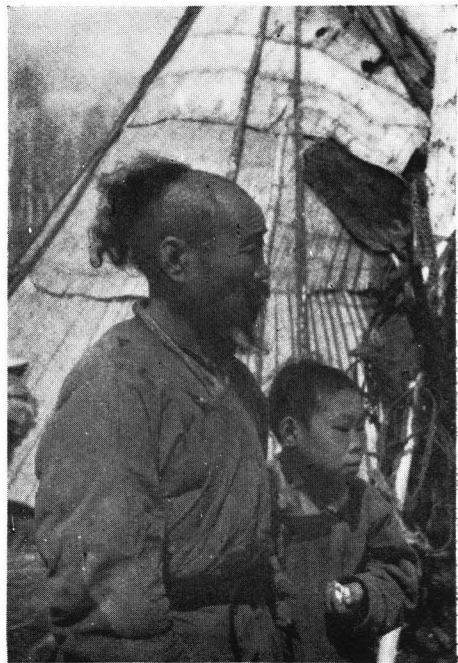


移動のあとに残されたユルタの骨組み。





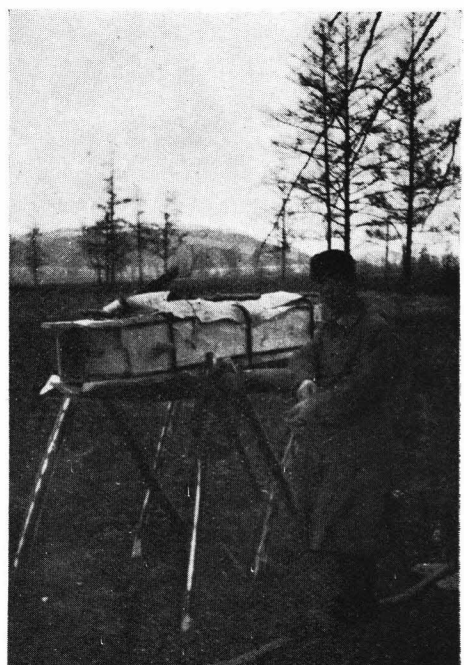
馬オロチョンの女.



馬オロチョンの男と男兒.



馬オロチョンの倉庫.



馬オロチョンの風葬屍体.

ガン河上流以北の密林地帯には、トナカイを家畜とするトナカイ・オロチョンがすむ。やはりおなじようなユルタ(右上)にすみ、移動生活をおくるが、いちじるしくロシア化しており、洋服を着、(右中)ギリシヤ正教を信じて屍体を埋葬する(右下)。一般に物質生活はゆたかたで、シナ化した馬オロチョンのまぜしさとよい対照をなしている。

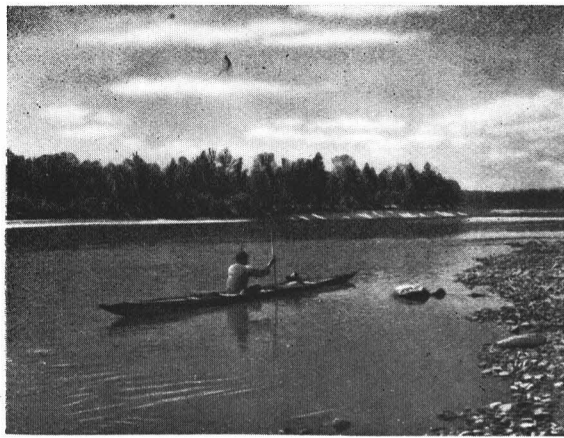




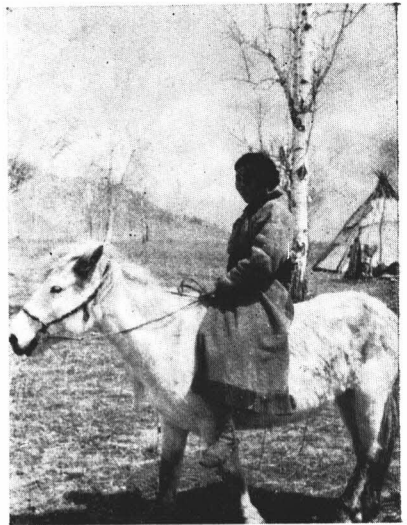
トナカイにのってゆく老婆.

荷をつんで河をわたるトナカイの列.





シラカンバの皮でつくった舟。トナカイ・オロチョン。



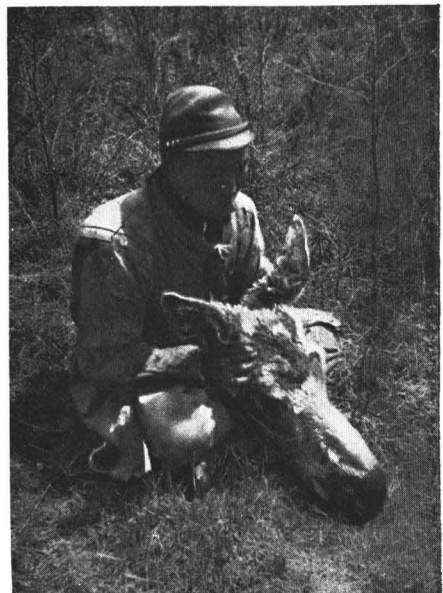
馬にまたがった馬オロチョンの婦人。



トナカイの乳しぼり。



荷物をつけたトナカイ。



ハンダハン（シベリアエルクシカ）  
の首をもつ馬オロチョン。

## 序

探検というものは、そのスタートにおいて、すぐれた発案者と、この案に共鳴して、これを推進してゆく何人かの熱心な同志と、そして背後から、この案が軌道にのるところまで、これを経済的に援助してくれるよき理解者と、すくなくともこの三つが揃わなければ、成立しない。

わたくしはその頃、ヒマラヤと大興安嶺とを考えていた。ヒマラヤの夢が破れたのちは、大興安嶺が氣にかかって仕方がない。もちろん大興安嶺なら、どこでもよいというのではない。はじめからその縦断を考えていたのである。

大興安嶺の同志のほとんどが、当時学生であったということ、異常な現象として、探検史上に特筆されねばならないであろう。戦争はたけなわであった。えらい学者たちが、われもわれもと軍に便乗して、右往左往している。それを嘲るかのごとく、大興安嶺の学生は、軍を乗りこえ、軍のまもりの外に、自由の天地を求めていった。

だからこの書は、一つの精神の記録である。

当時の学生の何人かは、いまではもうひとかどの学者になっているから、各自が探検の資料を整理分担して、論文集をつくることも、望ましいのであるけれども、われわれとしてはそれとは別に、やはり記録としての生まなましさを、残しておきたいという願望やみがないものがあつたので、最初は学術論文として独立さすつもりであつたものも、ばらせるかぎりばらして、紀行の中に織りこむことにした。つまり、精神の記録であるとともに、また科学的記録としても、けつして水準をおとさないような、すこし口はばたいたいい方をすれば、われわれでなければできないような探検報告を、ねらつたのである。

われわれより後に行われた、元満洲國林野局の大興安嶺調査隊は、一そう大きな收穫をもたつたことであつたろう。しかし残念ながら、その調査資料は全部、終戦とともに行方不明になつたというから、この書は、戦時中に行われた日本人の仕事の中で、さいわいに生きのこつた数少ないものの一つとして、大興安嶺に関するかぎり、今後のお役に立つであらうことを信ずる。

いん滅をまぬがれたとはいふものの、もし文部省の学術成果刊行助成金が、本書に対して與えられなかつたならば、われわれの大興安嶺は、いつ日のめをみるか、わからないところであつた。当事者に対して、厚く御禮申しあげる次第である。

出版のことを氣にやみながら、あれからはや十年過ぎた。しかし、この十年を待たつたお蔭で、思わぬよいこともあつた。探検隊は、じつに大勢の方々の支持をうけたのであるが、いまや晴れ

て、その方々に謝辞をのべることが、できるときとなつたからである。本文には、これらの方々のお名前をあげて、その御厚意を記念し、われわれの微意をあらわしておいたので、ここにはとくに、この探検の育ての親ともいふべき、藤村謙氏のお名前をしるすにとどめることを、お許し  
いただきたい。

最後に、この探検隊の隊長であつた関係上、わたくしが本書の編集者になつてゐるけれども、編集事務はそのほとんどすべてを、当時の隊員、吉良龍夫・川喜田二郎の二君に負つた。とくに吉良君には、原稿の大半を執筆してもらつてゐる。同君の労を厚く謝したのである。また本書の出版を心よく引受けてくださった、毎日新聞社に敬意を表しておきたい。

一九五二年二月

新らしい探検の構想を練りつつ

今 西 錦 司





## 編者のまえがき

一、この本は、一九四二年五月七月、今西錦司を隊長としておこなわれた、北部大興安嶺探検隊の公式報告書である。

一、隊員および編成は、つぎのとおりであった。( ) 内は、当時の所属をしめす。

隊長 今西錦司(京都大学理学部動物学教室)

副隊長・漠河隊長 森下正明(京都大学農学部昆虫学教室)

本隊員 吉良龍夫(京都大学農学部学生) 伴 豊(京都大学文学部学生)

小川 武(大阪商科大学学生) 折口勝夫(医師)

佐藤信男(測量隊) 山本幸雄(滿洲航空会社)

大塚 弘(無電技士) 郭 景章(無電助手)

支隊長 川喜田二郎(京都大学文学部学生) 藤田和夫(京都大学理学部学生)

支隊員 梅棹忠夫(京都大学理学部学生) 加藤醇三(京都高等蚕糸学校生徒)

土倉九三(京都高等蚕糸学校生徒)

漠河隊員 江原眞之(京都高等蚕糸学校生徒) 加藤醇三(京都高等蚕糸学校生徒)

川添宣行(立命館大学学生) 松本明保(測量隊)

本郷興作(無電技士) 張 貴堂(漠河警察隊)

関 警士(漠河警察隊)

一、この本の執筆分担は、つぎのとおりである。紀行の部は、一・探検の前夜、二・ガン河および五・ピスト

ラヤ河の三章を吉良龍夫が、三・白色地帯を川喜田二郎が、四・漠河隊を森下正明が、それぞれうけもった。ただし、専門的内容をふくむ部分は、隊員七名が筆をとったものを、各章の担当者が、できとるな場所に挿入した。内容に関する責任をあきらかにするため、各節のおわりに、執筆者の名を註記しておいた。専門別筆者は、植物(吉良・川喜田)、動物(梅棹)、地形地質(藤田・川喜田)、民族(今西・森下・伴)である。用語および文章の統一には、吉良があたった。

一、地名は、不統一な日本名およびシナ名をさけ、なるべく國際的な慣用名にしたがった。原綴りおよび各國名の対照は、巻末の地名索引によられたい。

一、動植物名は、それぞれ専門学者の同定をわすらわした。同定の労をとられた、北川政夫、佐藤正己、堀川芳雄、徳田御稔、清棲幸保、杉谷岩彦、奥村定一、その他の諸氏に、ふかく感謝する。なお、採集動植物目録にふくまれている生物については、原則として本文中にはラテン名をあげなかった。

一、引用文献は、一節ごとにまとめて、節のおわりに註記した。

一、折りこみ地図は、満洲航空会社により撮影された垂直航空写真をトレースしてえられた水系図を原図とした。ただし、この原図には、三角測量による修正がほどこされていないので、アムール河およびアルガン河の流路については在來の地図を参照し、中央部については、われわれによる天測結果をもちいて、ある程度の修正をくわえた。製図は、小野三正氏をわすらわした。

一、挿入した写真は、森下正明・藤田和夫・小川武の撮影により、凸版挿絵は、牧野四子吉・高柳重雄両氏の手になるものである。

# 目次

## 序

編者のまえがき

## 一、探検の前夜

南から北へ(三) 傳統(九) 大興安嶺の密林地帯(二六) 探検の歴史(1)(二三) 探検の歴史

(2)(三〇) 出発の前夜(三三)

## 二、ガン河

三河(三三) 出発(三五) 最初のキャンプ(六六) 森林ステップの自然誌(五五) さいごの部落

(七一) ノロとタイメン(七九) 紫陽道人(八一) 馬オロチョン訪問(八六) 馬オロチョンの生

活(五二) 樹海に入る(一〇三) 雪の峡谷(一〇八) 湿地と永久凍土(一二三) 森林の構造(1)(三三)

ナプタルダイ(一二八) ハンダハンとノロ(一三五) 冬を追うて(一四四) 英吉里山(一五二) 主稜ごえ

(一五七)

### 三、白色地帯

- 春峠・花峠 (二六七) 春は山の上から (二七四) 消えうせた分水嶺 (二七五) ビストラヤの源流へ (二七六)  
望み山 (二八〇) 湿地の様相 (二八〇) 水源から水源へ (二九〇) 荒涼たる世界 (二〇二) 礫原と岩屑被  
覆 (二〇七) 永久凍土のいぶき (二二五) 白色地帯 (三〇〇) ニジネ・ウルギーチ (三三三)

### 四、漠河隊

- アムールの船旅 (1) (二三五) アムールの船旅 (2) (二四一) ジェルトウガ共和国 (二四六) モーホでの準備 (二五二) 第一歩 (二五七) 最初のトナカイ・オロチョン (二六二) 難行 (二六九) チャン・クエ  
イ・タン (二七四) チーリンジへ (二七九) トナカイ・オロチョンの墓 (二八三) チーリンジの生態 (二八六)  
うたがわれた日本人 (二九六) トナカイとともに (三〇〇) 待ちぼうけ (三〇七) 基地―支隊きたる  
(三二二) トナカイについて (三二六) トナカイ・オロチョンの経済生活 (三三四) クマラ河水源の偵察 (三三三)  
五、ビストラヤ本流からアムールへ

- 赤ひげの猟師 (三三九) ナキウサギそのほか (三四六) 森林の構造 (2) (三四九) 急行軍 (三五〇) 空からの訪問 (三五六) 本流の渡河 (三七〇) 河辺林の構造 (三七五) からまわり (三八二) オーコリドイ (三八五) オートコリドイの自然誌 (三九六) アカシカ・クマ・オオカミ (四〇四) 魚の世界 (四〇九) わ  
かれ (四二七) 花の海 (四三三) 旅のおわり (四三七)

### 六、学術報告

地形と地質 (藤田和夫)

北部大興安嶺 (四九) 水系と山系 (四〇) 岩石の分布 (四二) 地形発達史 (四六) 特殊な地形

(四九)

過去の氣候 (藤田和夫・川喜田二郎・吉良龍夫)

礫原と岩屑被覆 (四五) 永久凍土層 (四六) 氷河遺跡 (四六) 東シベリアの寒冷期の状態を説明す

る一仮説 (四七) 他地方との対比 (四七) むすび (四七)

落葉針葉樹林の生態学的位置づけ (吉良龍夫)

東シベリアの落葉針葉樹林 (四七) 落葉針葉樹林の領域 (四七) 氣候帶上における位置づけ (四八)

再検討 (四九) 東北アジアの氣候区分と生態系区分 (四九)

採集植物目録 (吉良龍夫) (四九)

採集動物目録 (梅棹忠夫) (五〇)

農業北限線の問題 (川喜田二郎)

まえがき (五四) 温度指數三五度線と農業可能限界線 (五五) 北部大興安嶺の周辺 (五五) 日本列

島の場合 (五六) ソ連領シベリアの場合 (五七) その他の地域 (五三) 農業北進をはばむ要因 (五六)

## 索引



## 附表目次

- 表1 馬オロチョンの狩猟表 (六六)
- 表2 馬オロチョンの交易山貨表 (九六)
- 表3 斜面の向きによる森林構造のちがい (一三)
- 表4 斜面の向きによる土壌断面のちがい (一四)
- 表5 灌木性カンパ類二種の比較 (二八九)
- 表6 降雨と凍土の融解との関係 (二九)
- 表7 トナカイ・オロチョンの移動路 (三〇)
- 表8 モーホ・オロチョンのトナカイ所有数 (三二)
- 表9 モーホ・オロチョンの支出表 (三三)
- 表10 モーホ・オロチョンの狩猟表 (三四)
- 表11 モーホ・オロチョンの収入表 (三五)
- 表12 各水系における魚の分布 (四二)
- 表13 タイメンとシユーカーの胃の内容 (四三)
- 表14 六種の魚のあいだの食物連鎖関係の模式 (四四)
- 表15 レノックとハイルスとの食物の比較 (四五)
- 表16 魚の体重階級 (四六)
- 表17 北部大興安嶺の河川における魚類社会の構造 (四七)
- 表18 おもな岩石標本の検鏡結果 (四八)
- 表19 ユーラシアの亞寒帯針葉樹林帯のおもな樹種のすみわけ関係 (四九)
- 表20 ユーラシア亞寒帯各地の乾湿度表 (五〇)
- 表21 東北アジアの氣候区分表 (五一)
- 表22 オビ北地の播種面積 (五二)

## 挿図目次

- 図1 北部大興安嶺のおもな水系 (三三)
- 図2 最近のおもな探検隊のルート (四〇)
- 図3 ヨーロッパとアジアをつなぐ黒土の帯 (五一)
- 図4 ドラガチェンカ出発 (五二)
- 図5 泉のほとりの雪田 (五三)
- 図6 ウスト・クリーからステップのなかをボクロフカへ (五四)
- 図7 オオノロ (五六)
- 図8 ガン河の左岸にみられた玄武岩の露頭 (五七)
- 図9 シルホーワヤのキャンプ (五八)
- 図10 シルホーワヤの夕ぐれ (五九)

- 図11 トウラ川合流点ちかくのガン河の谷 (二七九)  
 図12 野地坊主との最初のたたかい (二八四)  
 図13 馬オロチョンのボルカン (その1) (二八八)  
 図14 ボルカン (その2) (二八九)  
 図15 馬オロチョンの家族あたり馬所有数 (二九三)  
 図16 オロチョンの分布図 (二九四)  
 図17 イワノガリヤスの枯れ野 (二九五)  
 図18 馬オロチョンのものおきからでてきた器具類 (二九六)  
 図19 峡谷部の雪 (二九七)  
 図20 流れのあとの凹地をうずめた野地坊主 (二九八)  
 図21 流れのふちの野地坊主 (二九九)  
 図22 斜面の向きによる森林の構造のちがい (三〇〇)  
 図23 ガイブシャン (三〇一)  
 図24 ナプタルダイの遠望 (三〇二)  
 図25 ハンダハンの糞 (三〇三)  
 図26 シベリアエルクシカ (ハンダハン) (三〇七)  
 図27 ノロとハンダハンの糞の分布 (三〇八)  
 図28 ガン河の最源流 (三一五)  
 図29 英吉里山の頂上 (三一五)  
 図30 せんたくと着換えをすませて (三一六)
- 図31 支 隊 (二六六)  
 図32 ユルタ・テント (二七三)  
 図33 ビストラヤ本流とナラチの合流点 (二七九)  
 図34 マメカンバとコウアンヒメオノオレの葉の比較 (二八九)  
 図35 ビストラヤ上流の谷における湿地の分布 (二九三)  
 図36 サカイツツジの花 (二九三)  
 図37 ビストラヤ最源流の谷 (二九七)  
 図38 中央部山地の貧弱なカラマツ林 (三〇〇)  
 図39 山火事のあとにできたマメカンバの乾性イエルニ  
 タ (三〇四)  
 図40 礫原の諸相 (三〇六)  
 図41 基地における礫原の断面 (三〇七)  
 図42 ジャーリンドのハイサーグラフ (三〇七)  
 図43 かたむいて立つカラマツ (三〇七)  
 図44 モンドリの谷のナレヂ (三〇八)  
 図45 ニジネ・ウルギーチの中流にて (三〇九)  
 図46 アムール河 (三三三)  
 図47 アムール峡谷のソ連がわの岸にみられるシベリア  
 アカマツの林 (三四五)



- 図48 峠のほこら (二六〇)  
 図49 トナカイのくびかざり (二六三)  
 図50 トナカイ (二六三)  
 図51 トナカイ・オロチョンのかりのユルタの内部 (二六五)  
 図52 ユルタの構造の複雑化の系列 (二六五)  
 図53 北方アジアの移動民族の住居形態分布図 (二六六)  
 図54 ラオコウの部落 (二六六)  
 図55 トナカイの鈴 (二七〇)  
 図56 漠河隊のはじめてのキャンプ (二七一)  
 図57 焚き火とチャン・クエイ・タン (二七五)  
 図58 リスとりのわな (二七六)  
 図59 モンドリの流れをわたる (二八〇)  
 図60 チーリングジ盆地 (二八二)  
 図61 トナカイ・オロチョンの動態図 (二八四)  
 図62 チーリングジの耕作 (二九三)  
 図63 トナカイの背につむ容器 (三〇〇)  
 図64 大興安嶺の丸太小屋 (三〇二)  
 図65 モーホ・オロチョンの移動路の数例 (三〇四)  
 図66 トナカイ・オロチョンのパン焼き (三〇四)  
 図67 ホクマンリス (三二二)
- 図68 基地の小屋 (三二六)  
 図69 イェルニクに放されたトナカイ (三二八)  
 図70 トナカイ・オロチョンの倉庫 (三三三)  
 図71 トナカイ・オロチョンのハンド・バッグ (三三六)  
 図72 クマラ河水源への峠 (三四四)  
 図73 赤ひげの獵師 (三四四)  
 図74 コンホ (三四三)  
 図75 アムールナキウサギ (三四六)  
 図76 チョウセンシマリス (三四八)  
 図77 礫性の土地にそだつチョウセンヤマナラシ (三五〇)  
 図78 エゾノムラサキツツジの密生 (三五二)  
 図79 カラマツ林におよぼす山火事の影響 (三五四)  
 図80 シラカンバ若木の密生 (三五五)  
 図81 トナカイ・オロチョンのつくった魚どめのせき (三五〇)  
 図82 トナカイ・オロチョン冬営地の見取り図 (三六二)  
 図83 トナカイ・オロチョン冬営地の構造物 (三六三)  
 図84 トナカイ・オロチョンのスキー (三六四)  
 図85 ビストラヤの渡河点にて (三七三)  
 図86 早春の河辺林 (三七六)

- 図 87 夏の河辺林 (三七七)
- 図 88 蛇行と河辺林の新成 (三七七)
- 図 89 トナカイ・オロチョンの鹿笛 (三八三)
- 図 90 午後一〇時のオーコリドイ (三八七)
- 図 91 森林限界附近から西にむかつての展望 (三九〇—三九二)
- 図 92 オーコリドイ山頂 (三九三)
- 図 93 ハイマツの分布 (四〇〇)
- 図 94 森林限界附近の地衣原 (四〇二)
- 図 95 マンシュウアカシカ (四〇五)
- 図 96 オオカミの分布 (四〇八)
- 図 97 北部大興安嶺の魚類 (四二二)
- 図 98 ソルノピョーク斜面にできた草原 (四二〇)
- 図 99 夏の野地坊主湿地 (四三三)
- 図 100 チーリング盆地の花の海 (四三五)
- 図 101 トナカイ・オロチョンのしよいこ (四三八)
- 図 102 チーリング附近のアルバジハ本流 (四三〇)
- 図 103 トナカイ・オロチョン訪問のスナップ (四三二)
- 図 104 モーホの船着き場 (四三五)
- 図 105 北部大興安嶺岩石分布図 (四三三)
- 図 106 北部大興安嶺中央部の東西模式断面図 (四三七)

- 図 107 シベリアにおける永久凍土層の分布図 (四五七)
- 図 108 階段状地形の形成の過程をしめす模式図 (四六〇)
- 図 109 シベリアにおける年平均気温等温線および冬季の積雪量の分布 (四六二)
- 図 110 気候変化にもなり永久凍土層の変化 (四六三)
- 図 111 シベリアにおける洪積世氷河分布 (四六六)
- 図 112 東シベリア南部の植物社会分布図 (四七九)
- 図 113 温度指数の等値分布 (四八四)
- 図 114 乾湿指数の等値分布 (四八六)
- 図 115 ポクロフカの土壤水分平衡図 (四九〇)
- 図 116 東北アジアの気候区分図 (四九四)
- 図 117 スカンジナヴィアの農業北限地帯 (五二五)
- 図 118 シベリアの農業北限線 (五三七)

一、探檢の前夜



一九四一年の九月ははじめのある日、この大興安嶺探検隊のメンバーのうち、今西・森下・梅棹・川喜田・吉良の五人は、つれだって、ヤシの木かけ道をおもっていた。赤道にほど近い太平洋のまんなかのはなれ島——ミクロネシアのポナベ島——の、それも遠洋航路の港から正反対のがわにある、オネというしずかな村だった。濃いみどりのココヤシの葉をおしてやわらいだ熱帯の日ざしが、あずき色の土に、五つの影ぼろしをおとしていた。ときおりヤシの林のおくに、島民のニッパ・ハウスがちらりとのおいたが、ひるさがりの道には、ほかに人通りもなかった。その日からはじまる島民生活の調査の対象となるはずのこの村に、われわれは前夜についたばかりだったが、この島にきて一と月以上たいたいまでは、ヤシの木かけ道は、まるで長年あるきなれた道のように、氣やすかった。

四〇歳に手のとどころとする、学者としても探検家としても油ののりきった今西さんや、三〇歳まえの青年昆虫学者であった森下さんが、どんな氣もちでこの道をおもっていたかは知らない。しかし、まだ大学生になったばかりのあとの三人は、どうやら、はるばると来たものよ、という思いを、かみしめているらしかった。だれかともなく、三人の話題は、京都でわかれてきた、ふたりの仲間のうえにおちていった。

「藤田は漢河<sup>カキカ</sup>まで行けたかな？」

「かれに先きをこされるのは、残念しごくだな！」

「それよりは伴さ。うまくもぐりこめたかなあ。あいつのことだから、押しの手でやってるだろうけど……」

……。」

藤田は、京都大学の重力測定班にくわわって、満洲にわたっていた。松花江ソウホアキヤウを船でくだって黒龍江フクロンキヤウに出、うまくゆけば、満洲の北のはしにあるモーホの町までさかのぼっているはずだった。伴は、学生の海外旅行のむずかしいなかを、なんとかして内モンゴリアにもぐりこもうとしていたのである。

そうだ。われわれも、ほんとうは北へゆきたかったのだ。北方の大陸へゆきたかったのだ。南のはての小島に立ってみて、われわれの望みは、いっそうはっきりしたかたちをとっていた。南の島の生活は、それはそれでけっこうたのしく、また充実していた。けれども、せめてここが、ニューギニアかボルネオくらいの本格的な原始林の大島だったら……。ポナベ島は、淡路島の半分あまりの面積しかなくて、島の中央にある最高峯のうえに立つと、かなしいことに、どちらをむいても、珊瑚礁にくだける太平洋の波が、かすかに白い線となってみえるのであった。けれども、ながいあいだ楽しみにしていた、大リーダー今西さんにしたがっての最初の遠征のよるこびと、この夏にうけた本格的な探検家としての訓練が生かされてゆくであろう來年への期待とで、わたくしたちの心はふくれあがっていた。

「來年の今ごろは、どこにいらことだろうな。北かな。南かな？」

学生のもっている力が、貴重な人的資源として、ようやく軍の注目をひきはじめた時代だった。われわれが横浜を出帆して数日後に、学生の海外旅行禁止令がでていた。オネをひきあげて港のあるコロニアの町にかえってみると、内地の放送は、最初の大学生の卒業期三ヵ月くりあげをつたえた。しかし、こういう時代にも、とほうもないことを考える連中というものはあるものらしい。わたくしたちが、それだった。わたくしたちは、探検家になろうと考えていたのである。これは、奇妙なグループであった。

わたくしたちは、もう、ひとかどの探検家を氣どっていた。もっとも、文献による研究家ばかりおおくて、探検の実践的活動の経験をもつ人のほとんどいないこの國では、わたくしたちは、たしかに第一線であったかもしれない。われわれは、すでに、アルピニストとしての訓練を、そうとう積んでいた。高等学校時代から、一年に一〇〇日は山にのぼっていたという連中だった。三高の図書館には、ジオグラフィカル・ジャーナルが、全巻そろっていた。こんなものを借りだすのは、わたくしたちだけだった。ひまさえあれば、たぶん時には講義のほうを失礼してつくったひまに、あの特徴のある青い表紙を一冊々々くってみたものだった。われわれは、いきなり正統的な國際探検界の傳統を吸収しようとしていたのだ。それは、となりに京都大学をひかえて、アカデミックなふんいきにつつまれた、めぐまれた環境のせいでもあった。

われわれは、また、いずれおとらぬナチュラリストでもあった。アルピニストとしての訓練をうけながらも、それぞれに、野外の自然科学者としての素養を、すこしずつ積んでいた。大学にはいるときも、それぞれの傾向にしたがって、探検家になるのにもっともつごうのよさそうな学科をえらんだ。吉良は、農学部にはいつて、植物生態学に興味をもちはじめていた。梅棹は、理学部の動物学科にはいつた。藤田は、やはり理学部で、地質学科をえらんだ。川喜田と伴とは、そろって文学部にはいつた。ただし、文学部といっても地理学の専攻である。

高等学校の上級にすんだころには、もう内地の山のぼりでは満足できなかつた。あらゆる機会をつかまえて外地へ、國外へとエクスペディションをこころみた。ポナペ島にわたるまえに、わたくしたちは、ひととおり遠征の経験者になっていた。

一九三八年の夏、川喜田は、安江安宣氏とともに、北硫黄島をおとすれて、このグループとしての行動の幕を切っておとした。一九四〇年には、梅棹・藤田・伴の三人が、北朝鮮の山々の総まくりをくわだてて、敦賀をで

ていった。清津から冠帽峯山脈を横断し、摩天嶺をこえ、白頭山に向ってから一行の消息はとだえてしまった。健康のつごうで、出発の当日に足どめをくって京都にのこっていた吉良はいらいらして氣をもんだ。半月ちかい空白ののち、つぎのたよりは、突如として滿洲の長春からまいこんできて、留守本部を仰天させた。白頭山の頂上ちかくで、航空写真測量による極秘の地図をみた三人は、それを紙きれにすきうつしたのをもつて、白頭山の北面の密林地帯——金日成一派の共産ゲリラの活躍舞台であった——にとびこんでいたのであった。幸か不幸か、航空写真の修正製図にまちがいがあって、白頭山の火口湖天池から流れでるスングアリーの水源地が、谷ひとすじくいちがっていたために、三人は予想しない危地においこまれた。六日間の不安な旅ののち、スングアリー水源の訂正確認という、おもいがけない收穫をたすさえて、ポロポロの霜ふり服すがたが、滿洲がわの警備隊員をおどろかせた。この、当時の実力からみて、かなり放膽な行動が、うまく成功して、わたくしたちは、おおいに氣をよくしたものだ。おなじ年、川喜田は、滿洲がわの調査隊に参加して、西から白頭山の外輪山の一角に達した。その年の暮れから、一九四一年の一月にかけては、京大の学生にまじって、まだ三高の学生であった梅棹が、冬のカラフトのポロナイ・ツンドラに、犬ぞりと超短波無電機の性能のテストをこころみた。

一九四一年には、みんなが、京都大学の学生として、顔をそろえた。これで、やっと一人まえになれた。いよいよこの力を、日本の探検界の最大の支柱にしなくてはならない。わたくしたちは、まじめにそう考えていた。わたくしたちの頭には、オックスフォードの偉大な学生、ジノ・ワトキンスの夢があった。

ワトキンスは、わずか二二歳の一学生のとき、すでに二回の極地探検のリーダーをつとめてきていた。そのうち、犬ぞりによるラブラドルの探検は、かれを、王立地理学会の金メダル受賞者——ゴールド・メダリストといえ、英國探検界の最高位のひとびとなのだ——とした。「うまれながらのリーダー」というおり紙をつけられ



たかれは、つづいて一九三〇年、一九三二年と、グリーンランドに二度の探検をひきいた。そして、第二次遠征でかれは死んだ。わずか二五歳であった。しかし、まかれた種は死ななかつた。かれの出現によって、オックスフォード探検クラブの主導権は、フロックコートのお歴々から、学生あるいは学生あがりの若手にうつった。学生たちは、エルスメアランドに、みごとな探検記録をのこした。一九三〇年のグリーンランド探検隊の最年少者のひとりであったリンゼイは、一九三四年には、犬ぞりによるグリーンランド横断をやつてのけた。このときはじめて極地探検にくわわつたクロフトは、つづくスピッツベルゲン北東島の探検に、おもなメンバーとしてくわわつてゐる。

日本は、探検の傳統の確立という点では、イギリスよりも決定的におくれている。だが、かれらのやつたことは、われわれにだつてできる。日本に、若い探検家のグループをつくること。そして、探検の傳統を確立すること。幸いなことに、京都には、若手の乗取るべき大学人の探検クラブがあつた。それは、京都探検地理学会といつた。そのころの京大総長羽田亨博士を会長に、おもに京大関係の、おおくの有名な学者たちを会員にもつていた。梅棹たちは、白頭山からかえつたとき、すでに、探検地理学会の月一度の例会で、お歴々をまえに講演するという、高校生としては破格の光栄に浴していた。ちょうどそのころ、やはり探検地理学会の理事であつた駒井卓博士らの御厚意で、理学部の動物学教室のうらの小さな建物で、われわれ学会のジュニア・メンバーのクラブ・ハウスにあてがわれた。ここを根じろに、われわれは、いよいよ探検地理学会の乗取りにのりだした。

しかし、オックスフォードの場合とちがって、わたくしたちのなかには、卓越したリーダー、ワトキンスがいなかつた。そのかわり、京大には、すこし年齢ははなれていたけれど、やはり偉大なリーダー、今西さんがいた。わたくしたちは、そろって今西さんの門をたたいて、今西リーダーのひっぱりだしに努力した。とうとう今西さ

んはひきうけた。契約は、成立した。一九四一年のボナペ島は、その第一回の契約履行であり、このグループの實力の瀬ぶみでもあった。三人は、この入門試験に合格した。ボナペ島の報告書づくりを機会に、われわれの学問的實力も、きびしくたたきあげられていった。一方、藤田は、アムール水系の旅はうまくはこばなかったが、單身熱河にはいってドロンにまで足をのぼし、伴は、やはり熱河から隊商にまぎれこんで國境をこえ、内モンゴリアを縦断してかえってきた。實力のテストはおわった。えらばれたつぎの目標はどこ、それがこの北部大興安嶺なのであった。

この目標が、いつ、どうしてきまったものだったか、いまではだれもよく覚えてはいない。しかし、計画そのものは、すでに一九三九年に、一度今西さんによってくわだてられていたから、だれの頭にも消えがたくのこっていた。たぶん、ボナペからかえる船のうえ、うつくしい熱帯の夜になごりをおしんで、船尾の甲板のうえにこしかけて、夜光虫のえがきだすスクリュウのあとに見入っていたとき、とめどもなく流れだしてきた話題のなかから、しだいに現実味をおびてきたものだったろうとおもう。ふかい朝霧にとざされた、秋冷えの横浜に上陸したとき、われわれの決心は半ば以上きまっていた。そして、京都にかえってまもないある日、今西さんは、われわれのまえで、ポツリとこういったのだった。

「わしは、やろうとおもう。」

「やりますか、いよいよ。」梅棹がニコリとした。

「目標は？ ルートはガン河ですか、ゲン河ですか？」川喜田がのりだした。

「イキリ山をこえる。三河からモーホだ。」今西さんの答えはみじかい。

「三河からモーホか。三度以上あるな。まず一〇〇〇キロとふんで、三ヶ月だな。」藤田は目算を立てた。

「かなり手ごわいな。やれますか？」と吉良。

「やれる！」今西さんは語氣をつよめた。

「君たちがいる。そして、わしがいるではないか。われわれにやれなくて、だれがやるのだ。」

「やろう！」伴がすっとんきょうな声をあげた。はがね色に空の澄んだ、秋の日のことだった。

大興安嶺探検隊は、こうしてできあがった。

〔註〕

① 川喜田二郎（一九三九）硫黄列島。三高山岳部報告一四号、一三一—二三ページ。

② 梅棹忠夫・藤田和夫（一九四三）北鮮・白頭山。三高山岳部報告一五号、一—八五ページ。梅棹忠夫（一九四二）白頭山をこえて滿洲へ。京都探検地理学会年報第二輯、三三—四七ページ。

## 傳 統

統

傳

一九三五年の新年、京都大学白頭山遠征隊は、日本の登山史あるいは探検史のうえに、ひとつの新らしいエポックを画して、京都にかえってきた<sup>①</sup>。その隊員のうち、隊長今西さんをはじめとして、西堀さん、奥さん、谷さんの四人のひとびとは、京都一中の出身者であった。四人の先輩たちは、ある日、遠征の記録映画をたずさえて母校をおとすれ、講演した。講堂にあつまった一〇〇〇人の少年たちが、先輩たちの熱のこもった講演と、ぼう大な山体を白雪にかがやかせている白頭山のすがたとから、どんな感銘をうけたかは、数年のうちに明るみにでた。大興安嶺探検隊の隊員のうち、五人までが、この一〇〇〇人の少年のなかから、あらわれてきたのである。

ここには、傳統というもののありかたが、典型的なかたちでしめされている。探検の傳統にとほしい日本でも、わたくしたちには、わたくしたちなりに、現実的な傳統の地盤があったのである。ごくおさない子ども時代ならいざしらず、ほかの学生たちが、卒業後の就職や、らかな兵役のコースに頭をひねっているような時期に、わたくしたちだけが、探検家になろうなどという、およそ当時としては非現実的な夢をもちつづけていたのには、それ相應の傳統の支持があった。この大興安嶺探検の主体となったものは、たしかに、わたくしたち五人のグループではあったが、それにいたるまで、おおくの先輩たちが苦心してそだてあげてきた傳統をはなれて、偶発的にこういうグループのなりたちうる可能性はなかったであろう。京都には、それだけの地盤がそなわっていたのである。

もともと、京都というところは、日本における近代アルピニズムの發展に、おおきな役わりをはたした土地であった。大正の末期から昭和のはじめにかけて、日本アルプス登山の黄金時代に、京大および三高系のひとびとの活躍は、めざましいものであった。その人たちは、日本の登山界では、「京都派」などとよばれていたが、組織としては、A・A・C・Kという会をもっていた。アカデミック・アルパイン・クラブ・オブ・キョウトの略称である。京都大学白頭山遠征隊も、じつは、このA・A・C・Kの事業であった。

当時の日本には、まだ探検界というようなものはないから、A・A・C・Kの人たちも、登山家として有名であった。もちろん、有能なアルピニストぞろいであったことはいうまでもないが、この人たちの山の登りかたは、たんに野外での肉體運動をたのしむという意味でのスポーツ登山ではなかった。かれらは、はじめから初登山をねらっていた。かれらの登山は、探検的登山であった。それで、すでに内地には処女峯なく、ヴァリエーション・ルートも盡きたとき、かれらの開拓者精神は外地にそのはげ口をもとめたのであった。そして、一九三

五年のA・A・C・Kの白頭山遠征は、日本登山界の外地遠征時代の幕を、はなばなしく切りおとした。そののちの数年間というものは、おもに学生登山家からなるいくつもの遠征隊が、続々として外地に向った。千島、台湾、濟州島、樺太等々。そのころの、日本山岳会の機関誌「山岳」や、関西学生山岳連盟報告などには、ほとんど毎号、外地遠征の記録がのった。台湾をのぞけば、それらの外地の山は低く、登山技術の点からもさほど困難ではなかった。これらの遠征は、たんなるスポーツ登山というよりは、むしろ「遠征」そのものを目標にしていた。そして処女地の開拓を目標にしていた。

A・A・C・Kは、名まえのしめすとおり、「学士」たちの団体であった。それは、京都派のシニア・メンバーであった。これにたいして、ジュニア・メンバーたる学生たちは、京大のなかに、べつの団体をもっていた。やはり若いアルピニストたちの集まりであったが、京大ではほかの大学のように山岳部とはいわずに、傳統的に「旅行部」と称していた。もちろん、A・A・C・Kと旅行部とは、緊密な連絡のもとに行動した。そして、白頭山に刺激された日本の学生登山界が、外地遠征をしきりにくわだてていたころ、このふたつの団体は、いつのまにかもう一足さきをあるいていた。かれらは、外地では満足せず、國外へでた。

一九三六年、加藤泰安は、旅行部の現役をひきいて、冬の大興安嶺に遠征した。これは、のちのわたくしたちの探検隊とは反対の、鉄道から南の中部大興安嶺に、地図上の最高峯をもとめていったのである。しかし、めざす山は、頂上までカラマツにおおわれ、一八三五メートルという地図の標高も、いまから考えると、ほとんど信用できない。しかし、遠征としては、りっぱな成功であった。<sup>③</sup>おなじ年、今西さんは、冬の東部満洲をあるいている。あくる三七年の夏には、加藤泰安は、單身ホロンバイルから内モンゴリアにはいった。モンゴルの地は、このグループのながいあこがれのまどであった。かれは、ウジュムチンで、エーデルワイスの咲く土をにぎって

ポロポロ涙をこぼしたそうだ。

一九三八年には、A・A・C・Kは、木原均博士を隊長として、大挙して内モンゴリアにはいった。これは、自動車旅行ではあったが、東は熱河から北はダブス・ノール、西は百靈廟までを、二カ月にわたってくまなくかじめぐった<sup>③</sup>。おなじ年、旅行部もまた、鈴木信隊長のもとに、前後して内モンゴリアをおとすれた<sup>④</sup>。一九三九年には、今西さんは、森下さんとともに、ふたたび内モンゴリアにわたり、グンシャングク砂丘地帯にはいった<sup>⑤</sup>。ポナペ島・大興安嶺と、二年つづけてわたくしたちの副隊長であった森下さんは、ここではじめて海外遠征に参加したのであった。おなじ年、周布光兼を隊長とする学生隊は、メルゲンから北にむかって、北西小興安嶺を縦断し、アムール江岸のコマに達した<sup>⑥</sup>。この隊は、大興安嶺の瀬ぶみの役わりをある程度はたした。わずかながら濕地旅行の経験もつみ、八ミリの記録映画は、わたくしたちにも、つよい印象をあたえた。注目すべきことは、三八年ごろを境に、これらの遠征は、多分にスポーツ的な遠征登山から、しだいに本格的な探檢——學術探檢へと重点をうつしつづつあった。一九三九年の一月には、京都探檢地理学会ができて、國外遠征の主体が、A・A・C・Kや旅行部から探檢地理学会のほうへうつったのも、この変化をものがたっている。従來のアルピニスト系の人たちのほかに、おおくの活潑な野外研究者たちがくわわることによって、京都探檢地理学会は、學術探檢隊をおくりだす母体として、申しぶんのない実力をそなえるようになった。

探檢地理学会の創立直後には、イラン、ニューギニア奥地などをめざす、大學術探檢隊の計画が、矢つぎばやにたてられたが、太平洋戦争直前の緊張した國際情勢は、その実現をゆるさなかった。しかし、シニア・メンバ―たちが、こうした情勢にいそがしくうごいているあいだも、ジュニアスはじっとしていなかった。一九四〇年には旅行部員が総出で、探檢の基礎技術のひとつとしての、超短波無電による空地連絡のテストを、富士山を舞

台にくりひろげた。梅棹たちは、夏の休みに白頭山をこえ、川喜田もまた白頭山をおとすれたのは、まえにのべた。これと前後して京大からは、中尾・松森が、やはり北鮮の山にふみこんでいた。冬には、旅行部から、藤本武ほか五人が、カラフトに、白瀬中尉いらいはじめての犬ぞり旅行の経験をつんだ。

こうして、一九四一年のボナペ島遠征がきた。探検地理学会の名のもとにおこなわれる最初の遠征にしては、すこし貧弱すぎはしたが、開戦直前ともあれば、やむをえなかつたのであろう。その年の十二月開戦とともに、当時の旅行部のアクティヴ・メンバーが、ごっそり兵隊にもってゆかれたことを考えると、もつともわかいわたくしたちのグループが、じきじき今西さんの訓練をうけたのは、結果からみても、ひじょうに好都合であつた。もつとも、伴と藤田とは、一時的にせよ南方に轉向するのをいさぎよしとせず、大陸に初志をおした。また藤本も、單身測量隊にくわつて、中部大興安嶺の一部をあるいた。

玉石とりませとはいいいながら、よくもこれだけ毎年々々エクスペディションをやつたものだ。ひとつのグループとして、わずか数年のあいだのこの記録はたしかに驚嘆すべき活潑さであつた。このグループの人々をささえていた、根づよい未開地への意欲こそは、まさに、日本における最初の探検の傳統とよばれるにあたいしよう。しかも、いくつかの散發的な南方へのところみをのぞいて、その対象が、すべて大陸に集中していたことは、注意を要する。かれらの眼は、あきらかに西に向いていた。朝鮮から満洲へ、満洲からモンゴリアへとのびて、さらに西へ、大陸の中央部へと向いていた。この人たちは、いったい、なにをめざしていたのであろうか。

近代探検の歴史には、いくつかのエポックがある。おそらく、その第一期は、コロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマにはじまる、植民地獲得のための探検であつたらう。アフリカ奥地の探検、北西航路と北東航路への挑戦は、この時代の最後をかざる。そして、北西航路の探求にはじまつた極地探検は、しだいに、探検そのものための

探検へと変化して、一九〇九年のペアリーの北極到達、一九一一年のアムンゼンの南極到達を中心に、極地探検の黄金時代をつくりだした。いまや人類の到達をばばんでいる残された地点は、高アジアの南縁にならぶヒマラヤの巨峯たちをのぞいてほかにはなくなった。探検の極地時代とならんで、一九世紀なかごろにはじまった中央アジア時代も、ヘディンその他の活躍によって、ひととおりの地理的発見の時期はおわっていたが、十数座にのぼるヒマラヤの八〇〇〇メートル級——ヒマラヤン・ジャイアンツは、なお人類の接近を拒否しつづけて、高アジアの魅力をもちつづけている。アルピニストとして出発したA・A・C・Kの人たちも、その最初の目的をヒマラヤン・ジャイアンツにおいていた。冬の白頭山遠征は、終始ヒマラヤ遠征級の装備でおこなわれた。そして、じつは、A・A・C・Kは、すでに二回にわたってヒマラヤ遠征を具体化させていたのであった。A・A・C・Kは、当時としては、まさに全日本の代表者として、ヒマラヤに挑戦するだけの実力をそなえていた。しかし、二度の計画は、運わるく、満洲事変と日華事変との発生によって、それぞれ実現一步手まえで、ついえさってしまったのである。

時局の変化は、ヒマラヤへの途をとざした。けれども、高アジアの魅力は、ひとびとを、たえず大陸の内部へ内部へとひきつけてやまなかつた。シニア・メンバーたちが、若いアルピニストからすぐれた野外研究者へと成長するとともに、登山は探検へとかわったが、一步でも大陸の内部へと近づこうとする気もちにかわりはなかつた。大陸内部への道に、ひとつでも白色地帯があれば、ひとつずつそれをうすめてゆこう。そして、南からヒマラヤへの道がとざされたのなら、北から、より困難な、しかしより探検家にとって魅力的な道から近づこう。これが、いままでのべてきた遠征をつらぬいている、ひとつの夢であったようにおもわれる。

北部大興安嶺こそは、この西への道によこたわる、もっともおおきな眼ざわりであった。そこは、地理的にも



なお白色地帯にちかい処女性をもっていた。そこには、シベリアのタイガにつづく、ひろびろとした樹海があった。たとえ、アムールをこえてシベリアにふみこむ可能性は、まったくなかったとしても、アルピニストや探検家のもつ本能的な北方へのあこがれを、かなりの程度にまでみたくしてくれるに相違なかった。滿洲にいる日本の科学者たちも、たびたびここに手をのばしては、失敗していた。おそらく、ここ数年のうちには、その中央部の探検が、これらのひとびとの手で成功するだろう。そのころの日本の科学者にとって、行動の可能な、もつとも西にある地域は、いうまでもなく内モンゴリアであって、モンゴリアの学問的空白は、ちがった意味での白色地帯として、もつとも強い魅力をもっていたけれども、この北部大興安嶺というみごとにまとまった探検の場を、みすみす素通りしてゆくことは、とうていできなかった。

この探検に成功したら、そしてようやく探検家の卵にまでそだってきたわたくしたち若手が、その経験をを通じて一人まえにまで成熟することができたら、また大興安嶺の樹海のなかにすんでいる狩獵民族の生活をマスターして、ボナペの原始採集経済段階の民族から、中央アジアの遊牧民へと研究をすすめるステップとすることができたら、——そうしたら、もうなんの心のこりもなく、西に向ってすすむことができるだろう。内モンゴリアのどこかにすみついて、たんなる調査旅行のわくからはずれた、本格的な研究がやれるだろう。それも、アンドリュースの百万ドル蒙古探検隊のような、特殊な専門的興味のものではなくて、じかにモンゴリアの自然と人間とにとっくんで、そのうえにおおいかぶさっているアジア的停滞そのものの本質にまでせまってゆけるだろう。これが、大興安嶺探検にのりだしたときの、隊長今西さんの、そしてわたくしたちの、いつわらない氣もちであった。

統

傳

二年半ののち、わたくしたちの一部は、この望みをはたして、張河口に住んでいた。しかし、ここは、そこま

で筆をすすめるおりではなす。<sup>⑩</sup> (以上二節 梅棹・吉良)

〔註〕

- ① 京都帝國大学白頭山遠征隊 (一九三五) 白頭山。東京、梓書房。
- ② 京都帝大旅行部 (一九三六) 雪のホロンバイルより大興安嶺へ。山岳第三一年一号、九四—一三一ページ。
- ③ 木原均 (一九四二) 内蒙古の生物学的調査。東京、養賢堂。 宮崎武夫 (一九四三) 内蒙古横断。東京、朋文堂。
- ④ 宮崎武夫・鈴木信 (一九四二) 内蒙古の調査旅行。山岳第三六年一一二号、一一二八、五一—一〇三ページ。
- ⑤ 今西錦司 (一九四七) 草原行。武生、府中書院。
- ⑥ 京都帝大旅行部 (一九四〇) 小興安嶺横断記。山岳三五年、六九—一〇六ページ。
- ⑦ 今西壽雄 (一九四二) 富士山における無電並びに空地連絡演習。京都探検地理学会年報第二輯、七—二二ページ。 京都帝大旅行部 (一九四二) 富士山に於ける空地連絡試験報告概要。山岳第三六年一号、一—三〇ページ。
- ⑧ 藤本武 (一九四二) 冬期樺太踏査行。京都探検地理学会年報第二輯、二三—三二ページ。 梅棹忠夫 (一九四三) 犬橈の研究。探検三号、七八—一五四ページ。
- ⑨ 今西錦司 (一九四四) ボナヘ島・生態学的研究。東京、彰考書院。
- ⑩ 一九四九年はじめてから敗戦までのあいだ、今西錦司・森下正明・梅棹忠夫・加藤泰安・中尾佐助らは、カルガンの西北研究所員として、内モンゴリアの生態学的研究にしたがった。その研究業績は、まだごく一部しか発表されていないが、あらかしの報告としては、つぎのものがある。今西錦司 (一九四八) 遊牧論そのほか。大阪、秋田屋。

## 大興安嶺の密林地帯

大興安嶺という名まえが、ゴビの沙漠や揚子江の名とならんで、東アジア大陸のシンボルのひとつとして、日本人の記憶にしみこんだのは、かなりふるい昔のことである。たぶんそれは、日露戦争のころ、大興安嶺山麓の

鉄道爆破をこころみた沖・横川や、それをめぐって熱河のカラチン王府で活躍した河原操子などのひとびとが、國民の英雄としてものではやされた時代にまでさかのぼるのであろう。すくなくとも、戦争以前の軍國主義の時代を経験してきたものにとって、大興安嶺という名が、いつも、なにほどかのスリリングなひびきをもっていたことはたしかのようだ。

ところが、この大興安嶺という名は、ひとびとの心のなかに、どんなイメージをいだかせているか。これが、なかなかおもしろい。ゴビの沙漠や揚子江の名のあたえるイメージにくらべると、大興安嶺のそれは、おそろしく各人各様なのだ。つまり、その地理学的な特徴は、名まえほどには、一般の常識とはなっていないのである。こい茶いろにぬられて、滿洲平原の西のはしを一直線にかぎっている地図上の興安嶺は、たいていの日本人にはびょうぶを立てたような連嶺を想像させる。しかし、いったいその山は、雪をいただく高山なのか、岩山か、それとも密林におおわれているのか、とたたみかけられると、サッということになってしまふのだ。

ふつうの旅行者が大興安嶺のなぐめに接するのは、ハルビンから滿洲里に通じる鉄道の峠にかぎられている。浜洲線の列車が、チチハルの南で嫩江を西にわたると、やがて草におおれたなだらかな起伏が、ゆくてにあらわれて、ながい平原の旅につかれた眼をたのしませる。峠が近づくとつれて、丘はしだいに山らしくなり、谷もせまってくる。そして数時間ののち、列車は、さして急ではないが、雄大な大スロープにジグザグをえがいて、分水嶺の峠にさしかかる。しかし、もし旅行者が、けわしい、びょうぶのような連山を心にえがいていたとすれば、その期待はうらぎられる。しかも、峠から西への道は、東がわよりは一そうなだらかな、大波のように起伏する丘のあいだを、いつとはなくホロンバイルの高原にすべりこんで、名にしおう大興安嶺をこえてきたとはうけとれないのである。峠のあたりには、わずかの木立ちもみられるが、たいていの山々は草におおわれ、とりた

ていうほどの岩山もない。つまり、大興安嶺というのは、平均高度一〇〇〇メートル以上もあるモンゴリアの高原が、低平な満洲平原へと不連続にうつりかわる境目にそうて、モンゴリア高原をふちどっている、はばひろい山地の帯であって、山そのものは、さして高山的なものではない。それが、びょうぶを立てたような大山脈にみえるのは、大縮尺の地図のあたえるトリックであって、現実の印象からはとおいものなのである。

日華事変のはじまるころ、まだ高等学校生だったわたくしたちのもっていた知識は、この程度をたいしてこえるものではなかった。しかし、大興安嶺のような長大な山脈を、その一ヶ所だけから判断するのは、とんでもないまちがいである。鉄道から北、國境に達するまでの大興安嶺は、まるでちがった様相を呈しているのである。まず、そこは、廣大な密林地帯であった。わたくしたちにとって、これは一種の心理的な再発見であった。

日本人は、山といえばみな木がはえているものだと思っているから、鉄道以南の大興安嶺が、大半はだか山であることを知ると、なるほど乾燥した大陸の山とは、そんなものだったか、となっとくする。この発見の印象がよいので、こんどは、大興安嶺はどこへいってもそんなはだか山だと思ってしまう。だから、密林の大興安嶺の再発見の印象は、ひとしお強かったのである。おさないころ、大興安嶺の密林を舞台に、縦横に大活躍する少年小説の主人公に、血をわかせたときのおもいだが、よみがえってきたのかもしれない。再発見された大興安嶺の密林は、探検の対象として、やはり魅力的なロマチックな色どりをおびていたのだから。

鉄道の峠からすこし北、北緯五〇度あたりを境として、大興安嶺はすっかりその山相をかえる。そこから南では、たとえせこましい地形になれたわれわれの山脈の概念からはとおくとも、大陸的なスケイルで見れば、ほぼ一定のはばをもった山脈のかたちをとっているが、北のほうでは、もはや地図にあるようなきわだった連山は存在しない。五〇度線から北の、アムール河とアルグン河とのえがく半円のなかをうずめているのは、急にすえ

ひろがりにひろがって、ひとつづきの高原と化した大興安嶺なのである。のちにじっさいの観察によってあきらかにされたように、東に流れてスنگアリーにそそぐ河川と、西に流れるアルグン河の支流との分水嶺、すなわち地図上の大興安嶺は、このあたりでは山らしい山ではなくて、高い山々はかえって分水嶺をとく西にへだたっている。分水嶺は、單に、西からと東からとの浸蝕力のつりあっている線にすぎないのだ。つまり、山脈としての大興安嶺は消えうせて、一大高原となってしまうのである。東はイルフリ・アリンをへて小興安嶺につながり、西は國境をこえてザバイカル山地につながるこの高原は、「滿洲高原」などとよばれることもあるが、ここではこれまでのならわしにしたがって、「北部大興安嶺」とよぶことにしよう。

この高原は、平均高度一〇〇〇メートルくらいの、頂きのまるい、晩壯年期の山々の無限のつらなりである。山々のあいだは、ふくざつにまがりくねったひろい谷によって、網の目のようにかこまれている。河々の谷には、悪性の濕地がひろがり、山々は頂きまで針葉樹の密林におおわれて、完全に文明人の交通をさまたげている。アムールとアルグンに沿うたものをのぞけば、このひろい山地の内部には、まったく部落がない。そのなかにいとなまれている人間の生活といえは、北方ツングースにぞくするオロチョン族のわずかな人口が、野獸をおうて轉々とすまいをうつしているだけであって、あの根づよい生活力をもったシナ農民も、ついにこの地方への入植には成功していないのである。

この北部大興安嶺の樹海は、南北が緯度にして三度半、東西が経度で五度のひろがりをもっている。もうすこし具体的にいうならば、そのなかには、北海道の全島がスッポリとはいってしまうのである。これにくらべるならば、中・南部大興安嶺などは、それこそびょうぶのようにうすっぺらいもので、段ちがいに魅力にとほしい。鉄道の峠のあたりにみられる森林は、この大樹海の切れっばしだが、ほそぼそと主稜づたいに南へ延長しているも

のにすぎないのだ。

このように、北部大興安嶺を文明からかけはなれたままに保ってきた重要な原因のひとつは、その氣候條件にある。滿洲の氣溫分布図をみると、滿洲の西北の一角は、一月の平均氣溫がマイナス三〇度以下をしめし、滿洲の寒さの極をなしている。すでに雪と氷との世界にある北緯七一度のスピッツベルゲンでさえ、一月の平均氣溫がマイナス一五度にすぎないのだから、この寒さはおそるべきものといわねばならぬ。この溫度では、地上のあらゆるものはいうまでもなく、地下何十メートルという深さまで、すっかり凍りついてしまう。もちろん、土のなかにある木の根もなにもいっしょにだ。ところで、マイナス一五度のスピッツベルゲンは、すでに寒さのために樹木のそだつことのできないツンドラ地帯に属するが、マイナス三〇度の興安嶺には密林がある。これは、矛盾した話のようだが、夏のあいだの溫度の問題である。スピッツベルゲンの七月の氣溫は、平均七度あまりしかないが、北部大興安嶺では、一五度ちかくはあろう。植物というものは、活動期である夏さえある程度あたたかければ、冬の休眠期に少々度はすれに寒くても、生きてゆけるのである。

しかし、このくらしいの夏の氣溫では、冬のあいだに地中ふかくしみこんだ凍結を、すっかりとかしてしまふことはできない。そこで、植物の根のはびこっている地表ちかくの土層だけは、夏のあいだとけているが、もっと深くは一年ちゅう凍りつづけるという、奇妙な現象がおこる。こういう、長年にわたってとけることのない深部の土層——永久凍土層——は、ツンドラ地帯にこそめすらしくないが、北緯五〇度というこんな南のほうの森林地帯にまでみられるのは、全世界でも、東シベリアから北滿にかけての地方にかぎられている。この地方が、冬には強力な大陸高氣圧の根城となって、世界第一の低溫地帯をつくり、しかもその寒さから地面を保護する雪の量が、ごくすくないということが、この永久凍土の分布に關係している。

雨の量はすくないが、その大部分は夏に集中してふる。夏には、つきつきととけてゆく凍土からしみでる水で、土はいたるところしめっており、凍土は水はけをさまたげるので、水びたし同然の土地もおおい。こういう土地にふった雨は、ほとんどたくわえられることなく、たちまち河はあふれ、谷を水びたしにする。いたるところ悪性の濕地がひろがっているのも当然である。濕地から流れでる水は、いつも不気味な茶褐色にいろづき、針葉樹の林のなかを、音もなくうねり流れる。

針葉樹の類は、北方森林の支配者である。けれども、いかに寒さに強い針葉樹でも、冬はマイナス三〇度以下、根は夏は水びたし冬は凍りつく、という條件のもとでは、どの種類もがはびこるわけにはゆかないらしい。このきびしい自然にたえうる樹木の種類は、きわめてわずかである。このえりぬきの強健な樹木の代表が、カラマツであることは、北部大興安嶺の樹海に、どくどくの特徴をあたえた。このカラマツの種類は、ダフリアアカラマツという。ダフリアというのは、アムール上流一帯の地方のふるいよび名である。もし、空から北部大興安嶺をみおろしたら、たぶんみわたすかぎりダフリアアカラマツばかりが、樹海をつくっているようにみえるだろう。それほど、ここにはカラマツがおおいのである。われわれのあるきははじめた五月の中旬には、まだカラマツの樹海は芽をふいていないで、山々は一めんにごまかなこすえのうすすみ色にぬりつぶされていた。六月の大興安嶺は、めざめるような新緑がうつくしい。われわれのなによりさんねんだったことは、このカラマツの海がこがね色にかわる秋の大興安嶺をみられなかったことだ。これだけは、いま思いかえしても、かえすがえすもくちおしい。シベリアの地誌をひもといてみると、いままで書きならべてきた北部大興安嶺の自然の特徴が、そっくりそのままではまる地方のあることをみいだす。エニセイ河の東、太平洋斜面と北氷洋斜面との分水嶺をなすスタノヴォイ山脈の西、このふたつにはさまれた、廣大な東シベリア山地一帯がそれである。エニセイスク、イルクー

ツク、ヤクーツク、ザバイカル（トランスバイカル）などの政治区画をふくむこの地方は、おそろしい冬の寒さ（一月の平均気温マイナス四八度の世界の寒極ヴェルホヤンスクは、ヤクーツク地方にふくまれる。ここにもカラマツの森林がある！）、高気圧におおわれてしずかな雪のすくない冬の天気、わりあい高温の夏、永久凍土層の分布、カラマツの圧倒的におおい森林など、まったく北部大興安嶺とおなじ自然条件をもっている。おなじ北方の針葉樹林帯でも、ちがった自然条件をもっている地方、たとえばエニセイ河から西の西シベリア地方や、スカンジナビア、スタノヴォイ山脈より東の沿海州、カラフトなどでは、冬の寒さがよほどおだやかで、低気圧や季節風のもとらす雪がおおく、寒さの地中へしみとおるのをさまたげるために、永久凍土層はほとんどみられない。そして、なによりもめだつた風景のちがいは、冬にも葉のおちない常緑の針葉樹のたぐい、なかんすくエゾマツ、トドマツのたぐいが、森林をつくっていることである。北海道やカラフトで、エゾマツ、トドマツの針葉樹林の、黒ずんだ緑いろの葉の厚ぼつたいかさなりをみた人が、あかるい大興安嶺のカラマツ林をおとすれたなら、おなじ北方針葉樹林にも、こんなちがったながめがあるのかとおどろくことだろう。

國境にとらわれない、自由な眼でながめれば、つまり北部大興安嶺は、東シベリア山地の一部なのである。ひろいシベリアのなかには、このくらいの大きさの未開地は、あちらこちらにあるだろう。そのひとつが偶然にもとじられた國境のこちらがわにあつた。しかも、軍事行動をゆるさない密林と濕地とのおかげで、一九四二年當時にも、一種の空白地帯として、國境の緊張から解放されていた。この偶然がさいわいして、われわれは、そのなかにもぐりこんでおもうままにふるまい、シベリアの自然に接することができた。しかし、いまとってみると、それはまことにみじかいチャンスであつた。いまでは、満洲は事実上のシベリアの一部となり、北部大興安嶺は、手のとどかない鉄のカーテンのむこうにかくれてしまつた。



## 探檢の歴史 (1)

一九四二年のわれわれの探檢にいたるまでの、この地方の歴史をものがたろうとすれば、近世極東の政治史にふれないわけにはゆかない。一七世紀のすえから一九世紀の中ごろにいたる時代、ダフリア地方は、北西からシベリアをこえてきたスラヴの勢力と、北上する清朝の政治力との、一進一退するあらそいの場であった。探檢の歴史も、これをはなれては、理解することができない。

ロシアによるシベリアの探檢開発が、バイカルの東にのびて、ヤクーツクの町がはじめて建設されたのは、一六二九年にさかのぼる。これらの帝政ロシアの開発の目的が、第一に毛皮、第二に金にあったことは、いうまでもない。しかし、こういう奪略産業だけにたよってはいは、開拓前線が前進すればするほど、食糧の確保は困難となる。いままなおのこっている流刑地シベリアの傳統は、この問題を解決するために送られた、囚人の強制農業移民にはじまっている。しかし、シベリアの自然は、いまのソヴィエトの技術をもってしても、たやすくは農業をうけいれない。まして一七世紀の農業移民は、どんなにかみじめなめにあったことだろう。

ちょうどそのころ、ヤクーツクから南下したボヤルコフの探檢隊は、ヤプロノイをこえて、はじめてアムールに達した。アムールの谷には、東シベリアにはみられない、ゆたかな草木と、河ぞいの肥えた土とがあった。下流には、穀物がみのり、毛皮獣の群れる森林があるというニュースがあった。寒さにいじめぬかれてシベリアをぬけてきたロシア人にとって、これがどんなにおおきな魅力であったかは、あとに引用するクロボトキンの紀行にもうかがわれる。アムールの開発は、即座にはじまった。ハバロフのアムール下降探檢(一六四九―五二年)は、

ポヤルコフより数年のうちに、くわしい報告をもたらした。この報告にもとづいて遠征軍がおくられ、はやくも五六年にはブラゴエシチェンスクに、五八年にはネルチンスクに、あたらしくとりで、がもうけられた。めざましいテンポである。

その黄金時代にあった清朝は、これにたいして、ただちに反撃にでた。ただし、その政策は、もっぱら政治力と軍事力とにたより、実質的な開拓をとまなっていない。たとえば、農業開拓の前線は、はるか南方、北滿の呼蘭あたりであった。しかし、北滿の原住民ツングースは、すでに清朝の軍事組織に編入され、いわゆる滿洲八旗の一員として動員されていた。アルバジン城の争奪戦に、従軍したオロチョンが奮戦したという記録は、この時代のことである。けれども、清の軍がしりぞくと、ロシアの移民はすぐ進出して、一六八七年ころには、ロシアは、ほとんどアムール地方占領のいきおいをみせた。

一六八七年のネルチンスク條約は、清朝のがわにおける、さいごの強力な政治的反撃であった。康熙帝のもとに充実しつつあった清の國力は、使節團に同行した大軍の圧力によってロシアを屈服させ、國境をアムールのかたなヤブロノイ山脈の線におくことに成功した。清朝外交史上の大成功といわれるこの條約によって、ロシアは一時アムールの經營をあきらめ、勢力を東に轉じて、カムチャツカ、ベーリングの開發にのりださざるをえなくなつた。

一方、この條約は、大興安嶺の一角を、はじめて歴史に登場させる。ネルチンスク條約には、ロシア、シナ間の官營貿易協定がふくまれ、アルゲン河をへだてていまの三河地方の対岸にあたる一部落が、交易地に指定された。三年に一回の交易には、数百名の隊商が、北滿のメルゲンから、ノンニの支流ノミン河をさかのぼって、北緯五〇度のやや南で大興安嶺をこえ、ハイラル河の源流にあたるクルドゥル川の水源をへて、西に流れる根河ガの

支流アイケンを下ってアルゲンに達した。交易地は、一八世紀以後、外モンゴリアのキャフタにうつるが、この交易路は、その後も、北部大興安嶺ただひとつの峠道として存続した。

ロシアのアムール再侵略は、一九世紀にはいって、ふたたび強力にはじめられる。この一世紀の空白のあいだに、清は崩壊の道をたどり、ロシアは、強力な近代資本主義國家となりすましていた。大西洋、インド洋への道を、ヨーロッパ先進國にさまたげられたロシアは、極東の海へと根づよい努力をはじめた。クリミア戦争をきっかけとして、ムラヴィヨフたちは、一方的にアムール河航行を断行し、これによって極東の基地に送られた兵力は、英佛の聯合艦隊をうちやぶった。清は、もはやこの事態に抵抗できず、アイガン條約(一八五八年)によって國境をヤブロノイからアムールにまで引き下げなければならなかった。アムール地方を掌握したロシアは、さらに南下をつづけ、日露戦争(一九〇五—〇六年)によって出端をくじかれるまで、たえず極東に干渉したいきさつは、ここにくりかえす必要もあるまい。

この膨脹期のロシアの探検活動は、中央アジアから極東一帯にわたる、組織的な探検調査によって特徴づけられる。不世出の大探検家ブルシェワルスキーをはじめ、王立地理学会の学者たちや軍人による活躍は、めざましいものがあつた。北部大興安嶺に關係のあるものをひろってみると、一八六四年には、アナキストとして知られたクロポトキンが、その極東旅行の途中、まえにのべた交易路によって、西から大興安嶺をこえ、メルゲンをへてブラゴエシチェンスクに達している。そのうち、クロポトキン・ルートなどとよばれるようになったこの隊商路は、ブチン兄弟(一八六四、七〇年)、プチャータ大佐(一八九三年)などによってこえられた。一九一〇年には、モチュルスキー大尉が、ノンニの支流甘河をさかのぼり、アルバジハ河の上流をへて、モイホに達した。これらの記録のしめすように、北部大興安嶺は、その周辺部をかすめられたにとどまり、分水嶺から西の中央部は

まったく未知のままにのこされた。

以上の記録は、アーネルト博士<sup>①</sup>によったが、そのくわしい内容はわからない。しかし、つぎに引用するクロポトキン自傳の一節は、このころのロシア探検隊の空氣の一端をよくつたえている。

「……わたくしたちは、地図のうえでみると眞黒なおそろしい大山脈の交叉点が、あんがい非常にらくなのを發見しておどろいた。その道でわたくしたちは、みすぼらしい一人のシナ老官吏が二輪車にのっておなじ方向に旅しているのにおいついた。この二日ばかりは路がずっとのぼり坂になっていて、あたりはいかにも高地らしい証拠をおびている。地面ははじめじめして、道はまるで泥だ。草もごく貧弱で、木もほそくいじて、おおく曲りくねって苔におおわれている。はげ山が左にも右にも立っている。わたくしたちは、いずれこの山ごえをするには大骨おりしなければならぬものとあらかじめ覚悟していた。すると例の官吏はオボのまえで、車からおりた。このオボというのは、石や木の枝をつみかさねたもので、それに馬の毛の束だの小さなポロきれだのが結びつけられてある。老人は自分の馬のたてがみをいく本かぬいて、それを木の枝に結びつけた。

「何です、それは？」

「オボさ。——このむこうにみえる川がアムールへ流れこむんだ。」

「では興安嶺はもうこれでおしまいですか？」

「さよう！ アムールまではもうこしてゆく山はない。小山だけだ。」

わたくしたちの隊商では大さわぎがはじまった。「この川がアムールへ流れてゆくんだとき、アムールへ！」とコサックはたがいにさげびあっている。かれらは、うまれたときから、老コサックから、よくこの大河の話

をきいていた。そこにはブドウの樹が野生し、平野がいく百マイルもつづいて、いく百万の人々に富をあたえているのだと。その後このアムールがロシアに合併されてからは、そこへゆく長い旅のことだの、最初の植民の辛苦困難をしたことだの、または上流地に移住したその同族の繁栄の話などを聞いていた。そして今わたしたちは、そこへゆく近道を発見したのだ！ わたくしたちの前は急な坂になっていて、その上をまがりくねった道が小川のほとりまで下って、そしてその小川は、山のはざまを通ってアムール河にそそいでいる。……

「おい、ここに変な木があるぜ。これあきつとナラだよ。」その急な坂を下っていったときにかれらがさげびだした。なるほどナラはシベリアにはないのだ。この高原の東の坂にくるまでは、一本もみあたらないのだ。「おや、クリの木だ！」かれらはまたさげびだした。そして「あの木は何だろう？」と、シナノキやその他のロシアには生えない木をみていった。それは満洲植物地帯にぞくする木なのだ。いく世紀のあいだ暖國を夢みて、いままのあたりにそれをみたこの北國人らは、うちょうてんになっている。かれらは、豊富な草におわれた地面にねころんで、恍惚としてあたりをみやって、接吻でもしそうにしている。いまやかれらは、一刻でも早くアムールにつきたいという熱望にもえた。それから二週間のちに、二〇マイル以内のところ最後の露営をしたときなどは、まるで子どものようにじれてきた。夜中すぎるともう馬に鞍をつけたして、夜あけまえに出立しようとしたくしをせきたてた。そして、ついに高台からその大きな流れがみわたされたとき、一般に詩的感じなどのないこのにぶいシベリア人の眼も、この雄大なアムールの青々とした水をながめたときには、さすがに詩的熱情にかがやいたのであった。されば、おそかれはやかれ——あるいはロシアの政府の援助をかり、あるいはその援助をまたずに、あるいは又その意に反してすらも、——いまは荒漠とした、しかし將來は希望にみちみちたこの大河の兩岸と、北滿洲の廣漠とした無人境が、ちやうどミシシッピーの兩岸

がカナダの旅行者に植民されたごとくに、ロシアの移住者に侵入されるのは、あきらかなことであつたのだ。」  
(大杉栄訳、クロボトキン全集第六卷。一部字句をあらためて引用した。)

このいきいきとした描写は、いろいろの点で興味ふかい。そのひとつは、東西の方向に非相称な、大興安嶺の構造のあらわれである。ゆるやかな西面にくらべて、格段に急な東斜面は、たちまちのうちに、旅行者を、ホロンバイルの高原より低い土地にみちびく。シベリアにみられないナラヤシナノキの出現は、高さとともに寒さが減じて、針葉樹のしげる亞寒帯から、温帯へとふみこんだことを意味する。しかし、こんなにまでコサックを狂喜させた温帯北部の風土——北滿洲は、「廣漠とした無人境」でしかなかった。南下してきた北國の人種ロシア人と、北上してきた南國うまれのシナ人との、北滿洲にたいする本質的な評價のちがいが、ここにあらわれている。ロシアと清との、アムール地方に対する政策のちがいも、おなじ原因にもとづく。北滿がロシアの勢力圏にあつたころの、ハルピンの農事試験場の活潑なうごきを考えると、北滿の黒土地帯の開墾は、あまりにもおそかつたといえる。そこが、名実ともに滿洲の穀倉となつたのは、わずか十数年來のことにすぎないのである。

話はよこにそれたようだ。シナ農業移民の北滿への流入もなかつたわけではない。ネルチンスク條約の前後には、やはり囚人の強制移民がおこなわれた。一八世紀中葉には、シナ本土の過剰人口の滿洲流入がはげしく、滿洲族のふるさとのシナ化をおそれた清朝は、一時は滿洲の封禁令(一七四〇年)をだして、移住を禁じなければならぬほどであつた。もちろん、南滿への移民は、すべて農業人口であつたが、北滿ことにアムール沿岸への移民は、あらゆるプロシテアの例にもれず、一つかみ千金を夢みる奪略産業の従事者がおおかつた。ちょうどそのころ、北部大興安嶺から流れだすアルベジハ河の流域に、ゆたかな砂金が発見されて、あらゆる方角からひと

びとをひきつけた。ジェルトゥガ金廠とよばれたこの産金地帯は、一八八〇年ごろもっともさかえた。この金廠について、もっとも興味のある歴史は、そこにあつまつたフロンティアの冒険者たちが、一種の「共和国」をつくっていたというものがたりであろう。かれらは、自治政府をもち、裁判官をもち、フロンティアにふさわしい特殊な慣習法をもっていた。人口は一二〇〇〇人に達したといい、大半はロシア人であったが、シナ人はむろんのこと、アメリカ人、フランス人、ユダヤ人までをふくんでいた。共和国は、一八八六年シナ軍によってたおされたが、かれらののこしたフロンティアの傳統は、いままなおのこっている。われわれの通った老溝金廠には、等身大の金塊がでたという傳説がつたわり、生きのこりの老人の口から、ゴールド・ラッシュの時代の魅力ある思い出をきくことができた(二四六、二七六、二八九ページ)。

一九〇六年に日露戦争がおわり、ついでシナ、ロシアにつづいて革命がおこってから、滿洲國の独立にいたる四半世紀のあいだは、探検史のうえでは、ひとつの特殊な時期をかたちづくる。この時代には、シナ、ロシアの政治力がおとろえ、たいした経済的意味をもたない西北滿洲などは、わすれさられたかたちとなった。日本の勢力は、南滿洲をよりどころとして、しだいに北上するが、そのころの日本の日本のレベルでは、未開地に調査隊をおくなどのことは、まだとても実現しそうになかった。おそらく一部の特務機関員などの暗躍はあったかもしれないが、記録にはのこっていない。しかし、眼をほかにうつすと、この時代は、帝國主義競争の色あいをおびた探検の時代がようやくおわつて、純学術的な探検が、とくに中央アジアをめぐるはなはなしくりひろげられたときにあたる。その代表者が、イギリスのサー・オーレル・スタイン、スウェーデンのスウェン・ヘディン、アメリカのロイ・チャップマン・アンドリュースらであったことは、これらの探検に國家主義的なおいのうすいことを、はっきりとものがたっている。この一般的な傾向を反映して、北部大興安嶺もまた、直接的な利害関係をもた

ない、第三國の學者たちによって、純學術的な探検をうけた。しかも、すくなくとも確實な記録のしめすかぎりでは、ようやくこの時代になって、はじめてその中央部の地帯に、文明人の足あとがのこされるのである。

〔註〕

- ① アーネルト（一九三九）滿洲の探検と鉱業の歴史。東京、興亞書院・学藝社。

## 探検の歴史 (2)

北部大興安嶺探検のパイオニアとしては、まず第一に、シロコゴロフ夫妻の名をあげなくてはならない。セルゲイ・ミハイロヴィッチ・シロコゴロフ教授は、一八八九年に生まれ、パリで人類学をおさめたのち、ロシアの王立アカデミーに席をおいた。ツングース学の第一人者としての、教授の北方ツングース諸族の研究は、一九一二年にはじまり、一九一三年にかけて、ザバイカル地方に三回の調査旅行をこころみたのが皮切りであったが、それ以前にも、ヨーロッパ・ロシアの北部、コーカサスなどに學術探検をこころみており、はえぬきのフィールド・ワーカーであったことがわかる。われわれにとって重要なのは、一九一五—一七年の滿洲およびモンゴリアの探検旅行であって、そののちは一九二二年までウラジオストクにあって極東の研究をつづけ、革命のあとは、白系露人としてシナに亡命した。一九三〇年から一九三九年になくなるまでは、北京にすみ、シナ全土の調査研究にしがっている。

一九一五—一七年に、シロコゴロフは、北部大興安嶺地帯のツングース族の調査に主力をそそいだ。そのあいだに、シロコゴロフと、よき協力者であった夫人とは、この地方に数回の旅行をこころみ、そのうちすくなくと



も一回は、ふたりのコサックをともなつて、アルグン河の谷から、マレクタ河——ジン河——ビストラヤ河流域——クマラ河上流をへて、北部大興安嶺の中心部を、東西の方向に横断している。そのころ、まったくの処女地であった北部大興安嶺は、探検家としてのシロコゴロフ夫妻の興味をつよくひいたらしく、各所で経緯度の測定をおこない、河川や水系について、できるかぎりの正確さで記録したとべている。そのあらまは、夫人の手によって、「北西滿洲・地理学的スケッチ」<sup>①</sup>という露文の報告となつて、一九一九年出版されたが、その原書はいまだにみる事ができない。一九三三年に、大著「北方ツングースの社会構成」<sup>②</sup>が英文でかかれたときには、すでに亡命のために資料がうしなわれており、ことに地図の原図が欠けていたのは、かえすがえすもおしまれる。しかし、この本にも、西北滿洲の自然景觀の描写のために、かなりのページがあてられており、ごくかんたんな概念図とあわせて、北部大興安嶺のかなり正確な概念をえることができる。

まえにのべたように、この地域の大興安嶺が、ザバイカル山地の延長ともいふべき一大高原であることをあきらかにし、これに滿洲高原という名まえをあたえたのは、シロコゴロフの功績である。そのほか、この高原の中央部が、ビストラヤ河の流域にぞくすることも、はじめてあきらかになつた。ビストラヤは、東経一二〇度にかい地点で東からアルグン河にそそぐ大支流であつて、滿洲がわではニウル河とよばれているが、この河はシロコゴロフ以前に考えられていたよりもずっとながく、地図にみるようなふくざつな屈曲をなして滿洲高原のなかを流れていることがわかつたのである。そのほか、ガン、ゲン、ビストラヤ、マレクタ、アルベジハ、パンガ、クマラなどの大河の流域の相互關係のはっきりしたこと、ビストラヤとアルグンとのあいだに、大興安嶺の分水嶺と平行してそれよりも高いジン山脈の存在すること、滿洲高原の山々は一般に森林におおわれているが、ところどころに森林限界をぬいた四〇〇〇フィート以上の高峯のあること、などは、いちじるしい地理的発見であつ

た。

民族学上の發見の重要さについては、いまさらいうまでもあるまいが、そのなかでも、この地方のほとんど唯一の住民であるツングースの、地域的・民族誌的なグループの分布をあきらかにしたのは、地理学的にもひじょうに重要な發見であつたといえよう。シロコゴロフによると、北部大興安嶺には、つぎの四つのツングースのグループがある。

馴鹿ツングース　滿洲高原の中央部から西北部、ビストラヤおよびアルバジハ流域。トナカイを家畜として

飼っている。

クマルチエン　パンガおよびクマラ河流域からイルフリ・アリン一帯。家畜としてウマを飼う。

メルゲン・ツングース　イルフリ・アリン以南のノンニおよび支流ゲンの流域。ウマを飼う。

興安ツングース　ガン河流域およびクロボトキン・ルート以南の中部大興安嶺の東西両斜面。ウマを飼う。

滿洲にいた日本人たちは、これらのツングースを、かれら自身の呼び名にしたがって、オロチョンとよんでいた。オロチョンというのは、トナカイをもつものを意味する。そして、トナカイ・ツングース以外の三つのグループは、遊牧文化との接触と草原に近い環境の制約とによつて、ウマを飼うようになっていたので、「馬オロチョン」とよばれ、トナカイ・ツングースは「トナカイ・オロチョン」とよばれていた。この本でも、ツングースのよび名は、このならわしにしたがっている。

シロコゴロフの英文の著書の出版にさき立つこと数年、ひとりの女流民族学者が、やはり、ツングースをもつて、この地方にはいった。かの女はリンドグレン嬢といい、一九二九年、ひとりのノルウェー人をつれて、三河から、ビストラヤの河口にあるウスト・ウロフ（キラムトすなわち奇乾の対岸）をへて、ビストラヤの中流にはい

り、おもに支流ニジネ・ウルギーチ附近のトナカイ・オロチョンを調査した。調査回数は、冬をふくんで三回におよび、そのほかガン河の上流や、南方の地方で、馬オロチョンやソロン族の調査をもおこなった。リンドグレンの研究内容はよくわからないが、その旅行談は、いちはやく一九三〇年のジョグラフィカル・ジャーナルに発表され、数枚の写真がそえられていた。<sup>⑧</sup> およそ、地図と写真のない旅行記ほど、もどかしいものはない。シロゴロフの精密な自然描写も、しょせんは、リンドグレンの数枚の写真にはおよばなかった。針葉樹林のなかを蛇行するビストラヤの流れや、トナカイにまたがったオロチョンの女たちの写真は、なによりも雄弁に、北部大興安嶺の樹海をつたえている。

この時代の学術探検の結果は、ドイツの景観地理学者ブルーノ・プレチュケの手によって集大成された。プレチュケは、一九三二年に、西北滿洲をおとすれた。まず、五月下旬から七月上旬にかけて、ハイラル―三河―ガン河―トゥラ河―ノミン河上流―クロボトキン・ルート―三河―ハイラルの行程をあるき、それから南に轉じてホロンバイル草原の調査にむかった。八月の末には、ふたたび北にむかって、三河からガン河をさかのぼり、支流ヤンギルチ（われわれの紀行にあるヤンギール）から、ビストラヤの支流ジン河をへて、難行のすえ、九月下旬にビストラヤに達した。はじめの予定では、アムールにぬける予定であったが、冬の接近と駄馬の故障とのため、ビストラヤ中流の右岸にある高峯オーコリドイ（われわれによって登られた）の直下からひきかえし、ガン河源流をへてハイラルにかえた。かれの報告は、「北西滿洲の山地」<sup>⑨</sup>、「東ゴビの景観学諸性質」<sup>⑩</sup>の二冊となつて出版されているが、とくに北部大興安嶺をあつた前者は、ドイツ式の大部のモノグラフで、よくこれまでの研究をまとめあげている。とくに、おわりにつけられた地図は、大興安嶺の山系・水系を、ほぼあやまりのない概念図としてあらわした、貴重なものである。

プレチュケについては、われわれには、にがい思ひ出がある。プレチュケの「北西満洲の山地」は、すでに一九四一年に木内博士によって紹介されており、<sup>⑥</sup>はやくからわれわれも注目していた。ところが、いよいよ具体的な探検の計画をたてるために、この本をさがしてみると、とうぜんあるはずの京都大学の図書室にみあたらない。あわてて東京大学へ借り出しを申しこんだが、とうとうまにあわなかった。もしこれがうまくみつかったら、つぎの節にでてくるような、むだな計画立案のくりかえしの必要はなかっただろう。なにしろ、われわれのよりどころとしていた、五〇万分の一の地図ときたら、およそ世のなかに、これくらいインチキなしるものはなかったのだから。一枚のプレチュケの概念図が、どのくらい貴重なものだったか、探検からかえってはじめたこれをみたわれわれは、おもわず卓をたたいてくやしがあったことだった。

話のでたついでに、このインチキ地図については、ひとこと悪態をついておかねば、腹がおさまらない。一九三二年参謀本部から公刊されていたこの地図が、どこの技術者により測量製図されたものかは、あきらかでない。地名そのほかからみて、ロシアがわの資料でなく、シナがわの資料にもとづいているらしい。アムール沿岸や鉄道沿線は、ロシアの八万四千分の一の実測図——いわゆるニウエルスト地図<sup>⑦</sup>——をとりいれているらしく、精確であるが、この地図はアムールに沿ってわずか一〇〇キロはばの地帯をふくんでいるにすぎぬ。たとえば、われわれのルートぞいでは、ガン河の下流、トゥラ河の合流点までしかないのである。五〇万分の一のインチキ性は、そのみごとに第一級の製図の仮面にかくされている。等高線は、北部大興安嶺の中心部まで、じつにこまかく地形をえがきだし、何百何十何メートルまでの標高、山の名・河の名はいうにおよばず、森林・湿地・道路・部落の記号にいたるまで、いずれも確信にみちたもっともらしさで記入されている。おなじ参謀本部の地図でも、一〇〇万分一東亞輿地図になると、地方によって内容にも図法にもはなはだしい不ぞろいがあり、一見し

